声や画面で家族とつながる時間への意識

― 第３回新型コロナウイルス調査から ―

主任研究員　北村　安樹子

第３波ともいわれる新型コロナウイルスの感染再拡大を背景に、例年なら旅先や帰省先で過ごす人も多い年末年始の日々を、今回は自宅や地元で迎えた人も多かったのではないか。取引先や仕事仲間との忘年会・新年会をはじめ、家族・親族や仲間との歓談など、コロナ禍以前であればこの時期は、自宅や飲食店等でさまざまな人と会って、食事やお酒をともにする機会が続く人も多い。しかしながら、今回の場合、大人数でのフォーマルな会食の機会が減った人や、規模やスタイルを変えるなどして行われたケースも多かっただろう。寂しさや物足りなさを感じた人もいた一方、ストレスが減り、ライフスタイルが健康的になるなど、心身へのポジティブな影響を実感した人もいたのではないか。

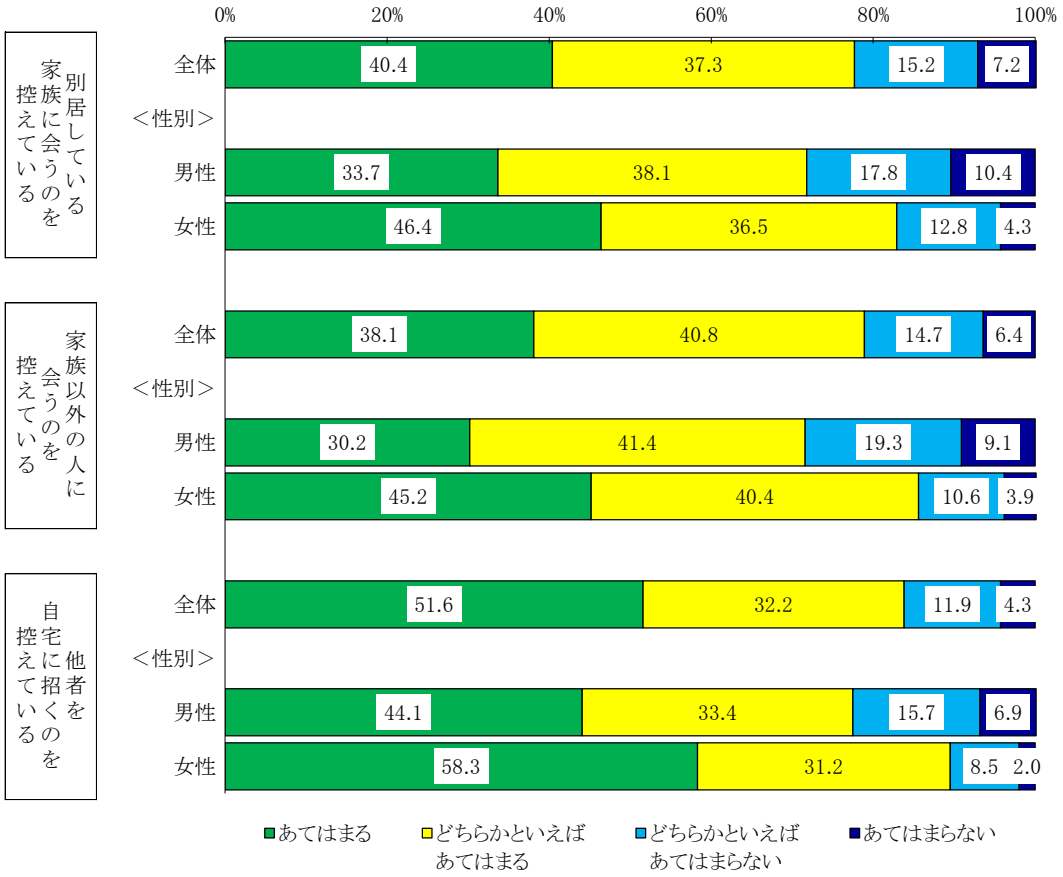
今回は、当研究所が行った「第３回新型コロナウイルスによる生活と意識に関する調査」[*1]から、別居する家族・親族との対面を控える人が依然多い日々の中、電話やメール、テレビ電話やビデオ通話など、声や画面を介して家族・親族とつながる時間の重要性に対する意識についての調査結果を紹介する。

＜家族･親族間でも依然続く対面機会の自粛傾向＞

９月中旬に行われたこの調査では、「別居している家族に会うのを控えている」「家族以外の人に会うのを控えている」「他者を自宅に招くのを控えている」という３つの設問で家族や他者との対面機会の自粛状況をたずねている。回答者のうち、直接会ったこと、電話やメール、インターネット等を通じて連絡したことがある別居の家族・親族がいる人に注目すると、「別居している家族に会うのを控えている」とした人（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の合計）は８割近くに達している（図表１）。これらの人々では、「家族以外の人に会うのを控えている」「他者を自宅に招くのを控えている」とした人もそれぞれ８割前後を占め、いずれの割合も女性が男性を上回る。

昨年５月末に緊急事態宣言が全面解除となって以降は、マスクの着用や換気、物理的な距離の確保をはじめ、少人数や家族単位での会食など、感染を予防しながら他者と交流する際に気を付けるべき視点についての専門家の知見が示されるようになった。このため家族・親族をはじめ、他者と対面する際にはそれらを守って機会をもった人も多いと思われるが、この調査が行われた９月中旬時点においてもなおまだ多くの人が、別居する家族・親族と対面すること自体を控えていたことがうかがえる。

図表１　第３回調査における家族等との対面接触の自粛状況（全体）



資料：第一生命経済研究所「第３回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」。調査対象者は全国の20～69歳の男女3,000名（各年代男女300名）。調査方法はインターネット調査（2020年９月実施）。

注　：回答者は、直接会ったことがあり、次の①～③のいずれかの方法で連絡したこともある別居の家族・親族がいると答えた1,868人。①電話や通信・通話アプリ等の音声通話、②メール等（ショートメールや SNS 等でのメッセージの送受信を含む）、③テレビ電話やビデオ通話。

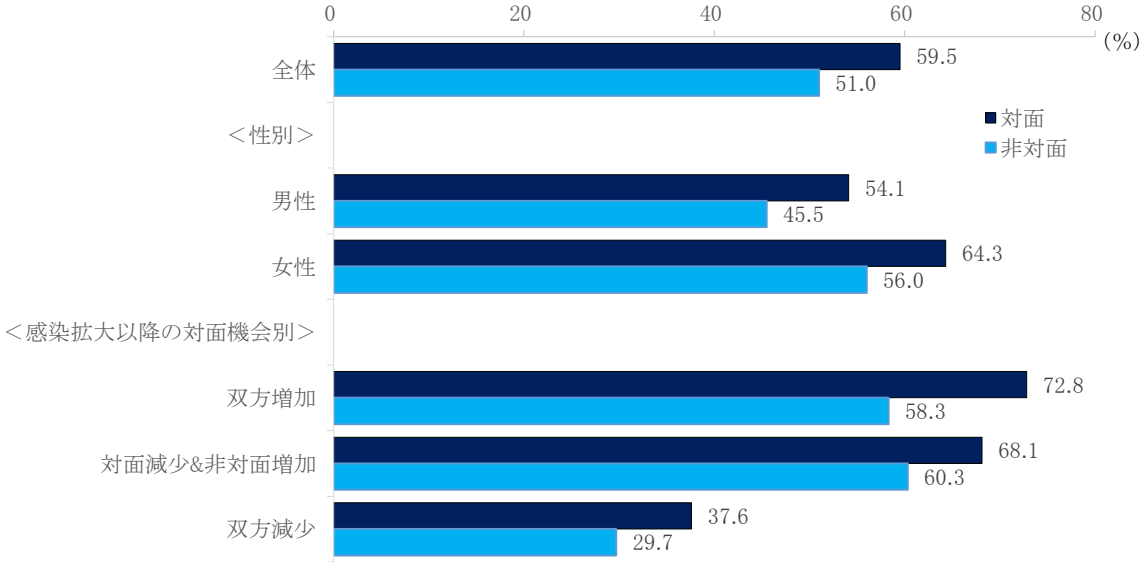
＜約半数が「声や画面でつながる時間」の重要性を実感＞

９月以降も、別居する家族・親族と対面すること自体を控え続ける人もいるなか、今回の年末年始にも、電話やメール、テレビ電話やビデオ通話等を通じて家族・親族へのあいさつに代えた人、コミュニケーションの時間をもった人もいただろう。これらの人では直接会って一緒に過ごす時間とともに、声や画面を介して相手とつながる時間に対し、それぞれどのような意識を抱いたのだろうか。

図表２は、図表１の回答者における、別居する家族・親族と「直接会って話したり、一緒に過ごす時間」（対面時間）、および「電話や画面を介して話す時間」（非対面時間）の重要性に対する意識を示している。これをみると、それぞれの時間の重要性を感じることがあるとした人の割合（「よくある」「ときどきある」の合計割合）は、対面時間の59.5％に対し非対面時間では51.0％と、直接会って話したり、一緒に

過ごす時間には及ばないものの、声や画面を通じてつながる時間の重要性を感じる人も半数を超えていることを確認できる。これらの意識には、対面機会のもちにくさやその際の過ごし方とともに、電話やメール、テレビ電話やビデオ通話など、多様な非対面コミュニケーション手段の種類や用い方、自分や相手の心身の健康状態など多くの要因が関連する可能性がある。このため単純に比較することはできないが、別居家族との対面を控え続ける人も多かったなか、９月時点では対面時間の重要性を感じる人が非対面時間の重要性を感じる人をやはり上回っていた*[2]。

図表２　別居する家族・親族と対面・非対面で話す時間の重要性を感じることがあるとした人の割合（性別・感染拡大以降の対面機会別）



資料：図表１に同じ
注１：回答者は図表１に同じ。図中の数値は、「よくある」「ときどきある」と答えた人の合計割合。選択肢にはこのほか「あまりない」「全くない」がある。
注２：対面は、「直接会って話したり、一緒に過ごす時間」、非対面は「電話や画面を介して話す時間」をさす。
注３：感染拡大以降の対面機会については次のとおり。なお、非対面でのコミュニケーション機会とは、①電話や通信・通話アプリ等の音声通話、②メール等（ショートメールや SNS 等でのメッセージの送受信を含む）、③テレビ電話やビデオ通話、による連絡をさす。
「双方増加」：対面機会とともに、非対面でのコミュニケーション機会がともに増えた人
「対面減少＆非対面増加」：対面機会は減少し、非対面でのコミュニケーション機会は増えた人
「双方減少」：対面機会とともに、非対面でのコミュニケーション機会が減った人

＜声や画面でつながる時間が強める対面志向＞

また、これらの傾向は男女に共通し、コロナ禍以前から男性に比べ別居する家族・親族と接する機会の多い女性の方が、対面時間の重要性を感じる人の割合は高い。そして、さまざまな理由によりコロナ禍以降も別居する家族・親族との対面・非対面時間をもつ機会を増やした人とともに、対面機会が減り、非対面時間をもつ機会が増えた人において、こうした傾向はより強かったことがうかがえる。

今回の年末年始にも、別居する家族・親族と直接会って、一緒に過ごす時間をもたないまま声や画面でつながる時間をもった人、また、感染予防に気を付けながら、対面機会とともにさまざまな方法で非対面のコミュニケーション機会を増やした人はいただろう。これらの人々のなかには、以前のように気軽に対面することが難しく、さまざまな制約のなかで粛々と過ごさなければならなかった忙しい日々のなか、声や画面を通じてつながりをもてることの利便性や安心感とともに、「直接会って話したり、一緒に過ごす時間」の重要性をあらためて感じた人もまた多かったのではないか。

（ライフデザイン研究部　きたむら あきこ）

【注釈】

*1　この調査の概要や家族のつながりに関する主な調査結果については、当研究所発行の以下のリリースを参照されたい。
「第３回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（家族編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2010_04.pdf

*2　なお、対面時間の重要性を感じることがあるとした人のうち、非対面時間にも重要性を感じることがあると答えた人は８割弱であるのに対し、非対面時間の重要性を感じることがあるとした人では９割超が、対面時間の重要性を感じることがあると答えている。また、①電話や通信・通話アプリ等の音声電話、②メール等（ショートメールやSNS等でのメッセージの送受信を含む）、③テレビ電話やビデオ通話のすべてに関して利用経験がある人では、非対面時間に重要性を感じることがあるとした人が59.1％と、対面時間に重要性を感じることがあるとした人（62.2％）に近い割合を占める。

＊弊社ホームページの「新型コロナウイルス意識調査特集ページ」にてこれまでに実施した調査データや関連レポートを公開しています。
http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=v_year